

ラヂーシチェフの文學手法

澁谷 一郎

A・H・ラヂーシチェフ(一七四九—一八〇二)は、十八世紀末におけるロシアの社會思想家として、最も輝かしい存在であった。だがそれとともに、ロシア文學史のなかで彼が占めている位置も、きわめて大きいといえよう。由來ロシア解放思想史において、文學の果す役割がいかに重要かは、ひろくみとめられてゐることである。文學のがわからぬならば、それはすぐれて政治的であつた。そしてこのことの原型が、すでにラヂーシチェフにおいてはつきりとみられる。文學者としてのラヂーシチェフは、その農奴制および専制政治の廢止の思想を、さまざまの形象の力と文學手法の試みをととして、訴えようとしたのである。

ここで主題に入るにさきだち、ロシア文學におけるラヂーシチェフの時點で交叉する縦と横のつながりを、ごくかんたんに確かめておこう。ラヂーシチェフに先行する時期の文學は、ロシア古典主義だつた。これは、ピョートル一世(一六七二—一七二五)の改革が文學の領域にもたらす最初のまとまつた結實

だつた。改革の全般は、まずもつて西歐文化の貪欲な攝取に現われた。ロシア古典主義もまたフランス古典主義の影響をうけて發達したことは、いふまでもない。しかしながらロシア古典主義の作家たちは、同時代の母國の現實生活に執筆の素材をもつて、口碑文學の要素をかなり多く取り入れた點に、特色がみられる。この潮流に屬する作家として、カンテミール(一七〇八—一四四)、トレチャコフスキー(一七〇三—一六九)、スマローコフ(一七一一—一七七七)、ヘラスコフ(一七三三—一八〇七)、ボグダノヴィチ(一七四三—一八〇三)たちをあげることができ、また當時のロシアにあつて百科全書的な科學者であり文化の巨匠として名高いロモノソフ(一七一—一六五)は、古典主義の文體理論をかため、文章上でさまざまの新しい試みをおこなつた。

ラヂーシチェフにつづくロシア文學の世代は、祖國戰爭(一八一二年、ナポレオンのロシア遠征)の前後をつうじて展開された國民的・民族的自覺の高揚と對應して成立するロシア・ロマン主義、とくに、その初期の時代である。この潮流は、當時のロシア社會のおもな生産階級が封建的な隸屬農民(農奴)であり、その解放運動でリーダーシップを取るのが貴族出のインテリゲンツィヤであるという事情によつて、また反封建的な社會運動にこの文學潮流が結びついてゐるという事情によつて、西歐のロマン主義とはかなりちがった色あいをおびる。だがこの點を扱うことは、さし當つて今の課題でない。この時期を代表する作家は、後期のジュコフスキー(一七八三—一八五二)、

プーシキン(一七九九—一八三七)、初期のゴーゴリ(一八〇九—一八五二)、デカブリストの詩人・作家たちであり、さらに三〇年代のレールモントフ(一八一四—一八四一)、ゲルツェン(一八一二—一八七〇)をも含めることができる。

つぎに、ラヂーシチェフと同時代のロシア文學では、二つの流れがめだっている。一つは諷刺文學の盛行であつて、あいついで發禁處分をうけたノヴィコフ(一七四四—一八一八)の雜誌活動(『雄蜂』『畫家』など)における地主貴族や聖職者の無智・ごう慢の暴露が、その代表的なものである。また十八世紀のロシアで最大の劇作家フォンヴィーゼン(一七四五—九二)は、古典主義の規範にとりながら、形象と描寫においていちじるしく寫實性をくわえており、これが、ラヂーシチェフ、クルイロフ(一七六九—一八四四)を経て、ゴーゴリ、グリボエイドフ(一七九五—一八二九)につながる抗議の文字の系譜を構成している。

もう一つは、カラムジーン(一七六六—一八二六)によつて代表されるロシア・センチメンタリズムの主流である。これは、世紀の末に西歐からもたらされるセンチメンタリズムの文學と、ほぼ時を同じくしておこり、どちらかといえば保守的な貴族の氣分を反映する。そして、生活の現實を美化して牧歌的な、實は地主貴族と農民の對立を無視する傾向をもつていた。しかしながら古典主義にくらべて、素材をより自由に選擇し、より具體的な形象を描き、内面的な心理描寫を重んじてロシア文學をゆたかにし、ロマン主義へバトンを渡す役割をはた

している。

ラヂーシチェフの文學は、ここにのべた諸潮流の影響をさまざまの度合いでうけ、あるいは萌芽を含んでいる。だがこれはいうまでもなく、諸潮流の受動的な折衷の結果でなく、彼が、自分の思想を説得するにふさわしい文體を模索し、自分のパトスを伝えるに有效な手法をたずねた結果にはかならない。このことは、『一週間の日記』(一七七三年)から『ペテルブルグからモスクワへの旅』(一七九〇年)にいたる作品系列の展開をみれば、明らかである。

二

ラヂーシチェフの名著『旅』の文體を論ずる場合に、そのヒントをあたえた作品として、スターンの『センチメンタル・ジャーニー』(一七四八年)をあげることは、帝政時代の多くのロシア文學史家の探るところであつたし、今日でも西歐の研究者によくみうけられる。この説は、ラヂーシチェフが捕えられて、きびしい訊問を受けていた時期の、彼のつぎの供述にもとづいていふと思われる。「結婚まで、私はむしろ文學にかんする本の讀書にたずさわつた。……ほかの通商上の書物のかんに、私はレイナルの兩インドにかんする歴史を買つた。この本を私は、自分の現在のみじめな境遇の端緒とみる事ができる。私はそれを一七八〇年か八一年に讀んだ。その文體が氣にいった……一般に讀まれるものと考えて、それをまねたいものだと思つた。……ヨリックの旅行のドイツ語譯を讀む機會があ

った時、私にはまた、それに従おうという気がおこった。⁽²⁾
 ラヂーシチェフはこの證言によって、自分がロシヤにおける
 禁止書でなく「一般に讀まれる」文學作品を讀んだのであり、
 自分の『旅』も、これらに類似するものであることを、裁判官
 に強く印象づけようとした。その實、レイナルはたしかに、植
 民地の原住民にたいする殘酷な搾取として奴隸制度を非難する
 けれども、それとの積極的な闘いを主張するまでにはいたらな
 い。スターンの作品は部分的に社會批判を含んではいるが、そ
 れが主題ではない。カラムジンによって「感受性の畫家」とた
 たえられるスターンは、客觀的な現實に注意をむけるよりは、
 主人公たる牧師ヨリックの主觀的・内的な經驗をたどって話を
 すすめ、感じやすい魂の、きわめてデリケートな心理的ニエ
 ンスと、さまざまの對立する感情の複雑で矛盾したからみあい
 を繰りひろげる。作者が描く情景の大部分は、すこぶる個人的
 な性格をおびている、といつてよい。例外的にみえる個所とし
 て、二つの章『旅行免狀——パリーの宿——』と『囚われ人——
 パリー——』⁽³⁾でヨリックは、籠のなかの椋鳥をみながら地
 下牢に閉じこめられた不幸な囚人を想像し、バスターユの恐怖
 に思いをはせる。しかしながらここでも作者が語ろうとするの
 は、囚人の苦しみではなくて、囚人にたいしてヨリックのあわ
 れみの情のなかに湧きあがる苦痛の感情の分析にほかならな
 い。要するにレイナルもスターンも、啓蒙思想の影響をうけ
 て、歴史的過程のなかでの人間の行爲を、受動的な力としてし
 か理解していなかった。従つて兩者の執筆態度は、傍觀者的で

あり、觀照的な點で共通する。「……わたしは四圍の事情に支配される人間だ——わたしが四圍の事情を支配することはできない」というスターンのことばは、『旅』の最初のページにある「わたしは迷いにさからうためのじゅうぶんな力を、自分の内に感じた。……誰でも自分と同様な人びとの善行に協力者たりうる、とわたしは感じた。」⁽⁴⁾というラヂーシチェフのことばは、ある意味できわめて對照的である。

しかしながらここにおいてラヂーシチェフの『旅』のなかに、『センチメンタル・ジャーニー』との類似またはその影響が全くない、といいきるのは、いわれないことであろう。たとえば『旅』の多くの個所で、過剰なまでに表現された感傷的ないまわしは、作者の急進的な思想をたくみにくるんで、あきらかにセンチメンタリズムの外観を呈する。また兩方の作品を一讀して、『嘆き煙草入——カレー——』の老托鉢僧と、『クリーン』の老いた吟遊の乞食とが、よく似た筋をもつことに氣づくのは、わたしだけでない。とはいへ、これは部分的な問題であつて、ラヂーシチェフが供述のなかで「それに従おうという氣……」と語るのには、彼が自分の主著を紀行文の形であらわそうと決心したことを意味するにすぎない。だが紀行文學という點なら、この時代には西歐でもロシヤでもその形式をとる文學がさかんに書かれ、さまざまの目的をもつ架空の旅行記や實際の見聞記が續出したことにならなくてはならない。D・ディフォウの A Tour through the Whole Island of Great Britain. 一七二四—二六年。J・スウィフトの『ガリヴァー旅

行記』一七二六年。モンテスキューの『ベルシャ人の手紙』一七二一年。A・ヤングの『Travels in France. 一七九二年。デイドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』一七二二年。チェリーシチェフ(一七四五—一八一)の『Путешествие по северу России в 1791 г. (10) カラムシンの『Письма русского путешественника 1789—1790 гг. (10)』ゲーテの『イタリア紀行』一八一六年は、スターンとラヂーシチェフに相い前後するおもな紀行文學である。これらの作品の列挙は、ラヂーシチェフを直接スターンにむすびつけようとする説にたいして、間接的にでも、より廣い視野を提供するであらう。

三

ラヂーシチェフの探らうとする文學手法をみよう。彼はこれを、『旅』の終章である『ロモノソフによせて』のなかでべている。デモステネス、キケロからミラポにいたる雄辯家を列挙したのち、つぎのようにいふ、「彼らの辯舌の規範は情況のなかに、言辭の美は感覺のなかに、論證の力は機知のなかに汲みとられた。血のめぐりのわるい批評家たちは、辯舌ひいでた人びとにおどろく一方、彼らのことをバラバラにすることによって、機知と空想へ規範を立てうると考えた……これが修辭學のはじめである。……ロモノソフはこの修辭學を意にも介せず、古典作家たちとの對話によって正された空想に従つて、おのが魂をみたした情熱を同市民たちに傳えうると考えた(11)」。古典主義の創作原理をなす「規範」にたいしてラヂーシ

チェフは、新しい前ローマン主義文學の基礎をなす「感覺」と「空想」の原則をおしだす。しかもこの後の原則は、文學上の先人たちとの「對話」により正されはするが、一切の「規範」にしばられることがない。現存する専制農奴制下のロシアの弊害を、最大の廣さと深さで示そうとするラヂーシチェフの「魂をみたした情熱」は、秩序と調和を重んずる古典主義の枠におさまりきらず、新しい手法を求めた結果がこれであつた。

ラヂーシチェフの詩論についても、みるべき新しい點を含んでいる。彼は、以前のロシアの詩形が、外國語の構造に由來する規則をロシア語へむりにあてはめる觀のあることを改めて、發聲上の考慮をも含めた新しいロシアの詩形を工夫し、その内容に合致させようと努めた。『旅』の『トヴェーリ』の章で、自作の詩稿『自由』にあたえている分折をみよう、「……流ちょうさを缺いた詩句のなかに、その行爲そのもののむつかしさの、象徴的な表現がみいだされる」。

さてラヂーシチェフの作品を特徴づけるものは、第一にいちじるしいリズムである。彼はある手紙のなかで、「心情は私のなかで理論に先んずることになれてしまいました(12)」といっている。はなはだしい場合は、法律草案、經濟論文のように、全く理性的・理論的な考究が必要とされるときでさえ、彼はリズムムへの逸脱を抑えきれない。

第二の特色として、ある研究家は擧げている、「ラヂーシチェフの自傳的傾向のなかに……彼の創作方法の基本原理がある」(傍點は筆者)このことは、彼の全作品に共通して、きわめて

明瞭にみとめられるが、とりわけ『旅』以後に書かれた諸作品には、逮捕、投獄、死刑を待つ期間、流刑生活をつうじて得た彼の體驗が、濃くにじみでている。この時期の代表的な作品である哲學論稿『人間、その死と不死について』(一七九二年)は、執筆の冒頭から自分の體驗を素材として、考察をくりひろげており、たとえばつぎのような一節をあげることができる、「狀況が必要である、狀況のとりでなければならない。そしてそれのないために、ヤン・フスは炎のなかにたおれた、ガリレイは牢獄に引かれた、君の友(私)は、イリムスク(シベリヤの流刑地)に閉じこめられている。」(傍點は筆者)

第三の特色は、認識の形成過程にたいしての、彼による唯物論的な理解によって裏づけされる。彼の論文、書簡のなかの多くの場所で感覺論の立場がはっきりと示されている。このことは、彼の創作の認識形而上的な前提となり、特にその教育論をすぐれたものとする。フランス唯物論の特色のひとつは、道德と人間の性格を、社會的環境と教育から説明した點にあったが、これは、そっくりそのままラヂーシチェフの文學手法のなかに入っていった。彼は自分の作品の登場人物たちの性格を、彼らの社會的環境と教育によって、描きわけける。それと同時に、人間の性格は、社會的條件を變えることによって變化させることが可能であり、農奴といえども、彼らの物質的條件を改善して教育をあたえるなら、すぐれた才能を發揮しうる、ということを示した。⁽¹⁶⁾ 一般に古典主義では、同一作品における主人公の性格を不變な、靜止的なものとして描くことが、また一つ

の「規範」をなしている。ラヂーシチェフによる性格描寫の可變性とダイナミズムは、たしかに古典主義からの一つの前進を示したものといえよう。しかしながらこの評價には、なおつぎのような留保をつけねばならないであろう、「彼はまだ、人間の性格の内面的な動きを、その全き多様さにおいて示すことができない。かかる描寫は、もつと後のレアリズムの文學によって、はじめて現われるのである。」⁽¹⁷⁾ とはいえ彼の試みは、「レアリズムの道への、きわめて重要な道しるべの一つだった。」⁽¹⁸⁾

四

ラヂーシチェフの作品は、自己分析への明瞭な傾倒、時おりはげしくきざしてくる感動性、「自然的人間」への親しい呼びかけなど、いくつかの點によって、たしかにセンチメンタリズムの影響をうけている。だがその反面で生活へリアルに接し、社會的な個性の描寫をひたむきに試みる場合の彼は、明らかにセンチメンタリズムの限界をこえ、その觀照の立場を脱している。「旅」の主人公たちは、生活から浮きあがった抽象的な、虚構された形象ではない。⁽¹⁹⁾ 作者がまず念頭におくのは、ロシヤの生きた現實であって、これを忠實に寫しだすことこそ、社會惡と闘うもつとも有效な手段だと考えた。従って作品に現われる人物はすべて、まず社會的に位置づけられ、それにもとづいてそれぞれの性格が描きだされる。そこでは、地主貴族の寄生的な墮落した生活と、生産的な民衆の健康なモラルが示され、作者は兩がわのふれあいの目撃者として現われると共に、

後者のがわに立って意見を吐く。ロシア・センチメンタリズムの主流を代表するカラムジンの手法は、ラヂーシチェフと反對であった。同様な農家の娘を描きながら、『旅』の『イエドロヴォ』の章のアニュータと『あわれなりザ』の女主人公の、描きかたの相違は、きわめて明らかである。カラムジンの描く人びとは、ほとんど社会的な色彩をおびていない。貴族の青年エラストの愛の告白にだまされたのち自殺するリーザを、作者は同情的な調子で描き、短い結びではエラストの魂にむくいをあたえるが、それにもかかわらず一編の道德的な結論はすこぶる冷酷である、「百姓の娘は愛することができない。」一般にカラムジンは農民を、全く貴族の立場からながめており、従って農奴制下の悲惨な農村生活を、牧歌調の幻想化された田園風景として描く傾向が強い。このことについてベリンスキーは、『一八四七年のロシア文學觀』のなかで、つぎのように指摘する、「最初の注目すべきロシアの小説はカラムジンによって書かれた。その女主人公は、だてものが誘惑した百姓娘——あわれなりザであった。……ふるい詩論(すなわち、センチメンタリズム——筆者)がおそらく百姓たちをも描くことを許すのである。だが百姓たちの生活、地位および教育とはゆかりのない感情と觀念をあらわにし、誰も話さない、……ましてや農民たちが話さないような文章語で會話する、芝居じみた衣しようをまとうた百姓にほかならない。しかしその上の何ができようか。十八世紀のフランス作家たちの牧人の男女が、ロシアの農民男女を描くためのすでにできあがった、りっぱな手本なので

ある。そっくりとりこむがよい。空色とバラ色のリボンをつけた麥わら帽子、髪粉、つけぼくろ、たが骨張りのスカート、コルセット、折りかえしつきのスカート、高く赤いかかとのついた靴がある……。要するにふるい詩論は、君たちの氣にいったすべてのものを描くことを許すが、この場合に描かれる對象を、君たちが何を描こうと望んだのかを知る可能性がすこしもないほどに飾りたてるよう、命ずるだけのことである。」ここでは、ラヂーシチェフとカラムジンの手法のちがいを通じて、文學的社會的役割りにたいする兩者の取りあつかいが、きわめて對立的な形で現われているのを見ることが出来る。ラヂーシチェフにとって文學は、讀者に社會意識をめぐめさせ、社會惡に對抗するための理論と情熱を提供する手段であった。カラムジンは多言をついやして「うるわしい自然」を描き、單に幻想的なものへの遊離した關心と甘美な感情を養うことによつて、讀者をいとわしい「うるわしからざる」現實から逸れさせ結果となつた。ドブロリューボフはカラムジンについて、『ロシア文學の發達における民衆性の參與の度合について』一八五八年のなかで、つぎのようにいう、「カラムジン派の作家たちは、わが國の北方の農夫たちがアルカジャの牧童たちに似ていると、實際に考えたのだろうか？ 彼らは果して、庶民には庶民なりの必要と……希求があり、幻想上のものでなく生活上の貧困と悲しみがあるのを、みなかったのだろうか？ もちろん彼らはこれを知っていたし、みてもいた。だが彼らは、このことを文學にもちこむことはない、このことは不體裁で、こっけい

でさえあると思つた……カラムジンの時代には、庶民階級の眞の感情や必要まで降りるのは、粗野なことだつたのである。⁽²⁾」
 ヘリンスキーにしてもドロロヒーボフにしても、その時代には、ラチーシチェフの名と作品について、口にするこゝとをえ抑えられていた事情と考えあわせるならば、彼らのこの指摘は、カラムジンの文學の否定的な側面をとりあげることによつて、間接的にラチーシチェフの文學の社會的な存在意義を指向してゐる、と考へることが出来る。

(99) 研究ノート

- (1) Raynal, G. T. F.: Histoire philosophique et politique des établissemens et du commerce des europe-ens dans les Indes. 1770.
- (2) Бабкин, Д. С.: Процесс А. Н. Радищева. 1952. с. 188~189.
- (3) スターン「オンチメンタル・ジャーニー」松村譯、岩波文庫版。一一二——一七ページ。(4) 同前。
- (5) ラチーシチェフ「ステルブルクからモスクワへの旅」澁谷譯。四ページ。
- (6) スターン、前出。三一—三四ページ。
- (7) ラチーシチェフ、前出。二八八—二九三ページ。なお、同じ章の注(6)を参照。
- (8) cf. Thaler, R. P.: An introduction to the English translation "A Journey from St. Petersburg to Moscow" by L. Wiener. 1958. pp. 27~28.
- (9) ラチーシチェフ、前出。三三—三六ページの註(2)を参照。

- (10) 先年、英語による抄譯が出てゐる。"Letters of a Russian traveler 1789~1790". transl. and abridged by F. Jonas. 1957. ix, 351 p.
- (11) ラチーシチェフ、前出。三一—三二—三四ページ。
- (12) 同前。二四六ページ。なお、同じ章の註(17)を参照。
- (13) Радищев, А. Н.: Полное собрание сочинений [Академия наук СССР]. Т. III, 1952. с. 355. (Письмо к А. Р. Воронцову)
- (14) Гурковский, Г. А. — в "А. Н. Радищев. Статьи и материалы". 1936. с. 171.
- (15) Радищев: Полное собрание сочинений, Т. II, с. 97.
- (16) 「旅」の「フロムリヤ」の章を参照。ラチーシチェフ、前出。二六八—二七六ページ。
- (17) Светлов, Д. Б.: А. Н. Радищев (Кригико-биорафический очерк). 1958. с. 181. (18) Там же.
- (19) ラチーシチェフ、前出。一四八—一六〇ページ。
- (20) カラムジン「あわれなりーザ」除村譯——河出版「世界文學全集」第二七卷「ロシヤ古典篇」。二七二—二八八ページ。
- (21) Егинский, В. Г.: Собрание сочинений в трех томах Т. III, 1948. с. 783.
- (22) Добролюбов, Н. А.: Собрание сочинений в трех томах, Т. I, 1950. с. 310.

(都立大學講師)